

《ニセコ町の「いま」を伝えたい》

【(株) 住まいるニセコ代表取締役 近藤信勝さんに聞く】

「興味から挑戦へ、
挑戦から人とのつながりへ、
人とのつながりから新たな世界へ」

聞き手：北海道大学法学研究科修士課程2年 牧 真由

本日の語り手：近藤信勝さん ((株) 住まいるニセコ代表取締役)



近藤さんはニセコに移住する以前は、IT企業や外資系の企業で働いていた。49歳のときに早期退職し、ニセコの地域おこし協力隊に入隊。農政課に配属された後、入隊して3年目に「住まいるニセコ」を立ち上げ、幅広い業務を手掛けている。また、車両系建設機械運転の資格や、チェーンソー取り扱いなどを行えるなど、多数の免許・資格を有している。

「新しく挑戦すること」―何かを始めようとするとき、不安があり、まずは何から初めていいかわからず、その一歩を踏み出すことに躊躇うことも少なくない。生きていく中でどのような決断し、挑戦を続けるのか。住まいるニセコの代表取締役の近藤信勝さんにお話を伺うことになった。

場所はニセコ中央倉庫群旧でんぶん工場(写真参照)。ここは、住まいるニセコが指定管理者となり、町民のための交流空間として活用している。子どもたちの遊び場や、テレワークに利用できるスペース、活動を始めようとしている人向けの掲示板スペースなどがあり、誰でも気軽に利用でき、人々の活動を応援したいという近藤さんの思いが詰まった場所だ。

たくさんの挑戦をしてきた近藤さん。一筋縄ではいかず、時には失敗もあり、それでも目の前のことに全力で取り組んできた。今回は、そんな近藤さんへのインタビューから、前向きに新しいことにもチャレンジするための一歩を学んでいきたい。

コラム：知ってる？地域おこし協力隊

ニセコ町では、地域おこし協力隊制度は、平成 30 年度までに 34 人の地域おこし協力隊を受け入れてきた。

地域ブランドや地産品の開発・販売・PR 等地域おこし支援、農林水産業への従事、住民票支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定着を図る目的で行われている。



ニセコ中央倉庫群旧でんぷん工場



子どもたちの遊び場

四九歳のとき、地方で経験を積みたいという思いから務めていた IT 企業を早期退職した。しかし、地方には知り合いがおらず、調べる中で先進的な取り組みをしている自治体として、四つの自治体に応募した。そして、中でも自然がさわやかでイメージもよく、住民自治がアグレッシブに行われているニセコ町で挑戦することにしよう。不安はなかったか尋ねると、「やりたいことに挑戦できる機会があるし、来たからにはやるしかないよね。知らないことに前向きになれる人がプラスの結果につながる」という。不安を前向きに変えるために一番必要なのは、自分自身の考え方なのかもしれない。さらに、ニセコに来た近藤さんがまず行ったのは、家を買ったことだ。逃げ場を作らず、ニセコ、全力で挑戦する意思の強さがうかがえる。これまでの経験を生かして、目の前にある知らないことを楽しもうとする姿勢が第一歩につながっている。

ニセコで生きていく
「来たからにはやるしかない」精神から学ぶ

地域おこし協力隊では農政課に所属し、人手不足などの問題がある農業のサポートを行った。近藤さんは外資系企業や IT 企業での経験があったため、幅広い年代の人が所属する協力隊の中では経験がある方にあたる。そのため、ある程度これからやろうとしていることの「こたえ」が予測できてしまうこともあったという。「でも、そんなときこそ、あたたかく見守り、みんなで作り上げることが大切なんだよ」。たしかに若い人は経験や財力では経験者に及ばない部分もある。しかし、思いが強く、アイデアも豊富であり、「年齢」「経験」などの外見でなく、それぞれの良さを生かして仕事に向き合ってきたことがうかがえる。

また、農政課での仕事を通して多くの人と出会い、「経験しないと語れない」という信条の下、幅広く取り組んだ。その時の働きぶりには「役場の職員より働いた」といい、当時は本当に大変だったそうだが、「それが今の仕事につながった」と振り返る。実際、そのときの働きが

地域おこし協力隊時代
「目の前の仕事を全力で」

実り、旧でんぶん工場の指定管理者の仕事へ
とつながったのだ。今、目の前の仕事ややるべき
ことに全力で取り組むことは、誰かがそれを見
ていて、新しいチャンスにつながるという。近藤
さんの仕事への向き合い方が見えてくる。

起業へ自分らしく生きるためのヒント

近藤さんは入隊三年目で「住まいるニセコ」
を起業した。近藤さんは地域おこし協力隊に
入隊する以前にも、三宅島に行って林業に二
泊三日で挑戦するなど、以前から「他に埋没し
たくない」という思いは強くあったという。また、
屋根にのぼって修繕したり、重機を使って雪か
きをしたりと、身の回りの色々なことに興味を
もち、失敗もあったが、とりあえず何でもやっ
てみる経験も、起業の際の後押しになった。

起業後は、清掃業務や施設管理業務、商品開
発業務など幅広い分野で活動してきた。手
広い業務の中でも、印象的だった業務の一つは、
今回お話を伺う舞台となったニセコ中央倉庫
群の指定管理者となり町民交流スペースをつ
くりあげていることだ。でんぶん工場だった歴

史を踏まえて、でんぶんを製造するときに使
うふるいを活用した子どもたち向けの遊具が
あったり、情報を気軽に交換できる掲示板ス
ペースや、現在、営業はしていないが以前は協力
隊員によるカフェもあり、誰でも気軽に立ち寄
り、交流できるスペースとなっている。

また、商品開発業務ではニセコ産品を多く
の人に食べてほしいという思いのもと、「ぼてと
せんべい」や「NISEKO農(ニセコの)ぱんぷ
うきん」などの開発を行った。自社工場をもた
ないため、多くの個数を作ることはできず、自
宅でかぼちゃをつぶすなど、人知れず多くの苦
労もあったという。「若い人はアイデアがでや
すいから、コストは自分が負担した」と話す。工
場を作ることも考えたが、町は設備投資に消
極的なこともあり、資金面で問題にぶつかった
という。そんな経験があるからこそ、次のよう
に提案する。

「若い人たちがもっと活発にアイデアをかた
ちにするために、町が応援する体制構築が必
要だと思う。まずはこの問題をみんなで共有
し、限りあるリソースを使いながら突破口を見
つけて、それを広げていくことが必要だよ。」

コラム：「食べたことある？ POTATO SENBEI」

住まいるニセコが手掛ける商品の1つに、POTATO SENBEI がある。普通のポテトチップスとは違い、そのカラフルな見た目と味のバラエティの多さにこだわったそう。

入っているパッケージもおしゃれで、ニセコのおみやげにおひとついかが？

<NISEKO 農 POTATO SENBEI>

男爵、きたあかり、インカのめざめ、
ノーザンルビー、シャドウクイーンの5枚入り
定価：540円(税込)



近藤さんの挑戦は新たな課題を共有するき
っかけになり、次世代の人への受け継がれてい
くことが期待される。そして、その挑戦を支え
ていたのは、何でも興味をもってやってみる精
神だったともいえるだろう。

ニセコで挑戦するということ

〜前向きな柔軟性と人とのつながり〜

お話を伺う中で強く感じたことは、近藤さんは、明るくて前向きな人ということだ。例えば、住まいるニセコの商品開発業務でも、すべての商品開発がうまくいったわけではない。例えば、ドライトマトの制作では失敗に終わった。このドライトマトは台湾に輸出しようとしたが、大規模な量を作ることが求められ、自社工場をもたない状態で大量生産を行うことは不可能だったという。このように起業してから一筋縄ではいかず、様々な壁にぶつかりながらも、一歩ずつ前向きに進んでいる印象を受ける。また、何か活動をしていて失敗したときには、次の道に進めばいいだけという。「当初の目的どおりにいなくても、何とか生き残っていく道を模索すればいい」と話す。住まいるニセコでも当初受注していた清掃業務がコロナ禍で停滞したが、他の施設管理や商品開発という路線で奮闘している。前向きな柔軟さを持ち、とりあえず挑戦してみる精神が伝わってくる。そしてその基盤となっているのは、仕事に



笑顔でインタビューに応じていただきました

限らず趣味も含めて、やりたいと思ったことに取り組んできたことがあると感じる。「自分は何でも屋さん」と語るように、業者に頼まずとも一通りのことは何でもできるという。挑戦することを特別視していないことがうかがえる。もう一点、印象的だったのは、「人とのつながり」が大切という話だ。ニセコは牧歌的なまちなち位置やブランド性は維持してほしいが、課題としては後進たちの育成が進んでいないことが挙げられるという。「自然は変わらない。だからこそ、人が大切なんだよ」と話す。協力隊は、会

社と違ってみんなが同じ方向を向いて仕事をしているわけではなく、一人ひとりが個性をもって活動をしているから、向いている方向がバラバラの時があるという。そのためにも信頼関係を築くことが大切という。「人」といっても、アイデアを出す人もいれば、それを具現化する人もいる。この両輪をバランスよく回し、「創造的摩擦」を起こすことが大切だが、現状まだ課題が残ると指摘する。町としての相談課を設けるなどの調整的取組を進めることを求め、問題意識を共有することが必要であるという。さらに、一人でできることは限られているからこそ、多くの人と協力して物事に取り組みこつて、できることが倍以上になる。身の回りにあるちょっとしたことに興味をもつことが、何か挑戦するときの足台になる。そして、その挑戦の中で、人との出会いを大切に、一緒に仕事に全力で取り組める仲間を見つけることで気づきや学びが得られて、次の新しい世界を模索するチャンスにもなる。変化の激しい時代の中に生きる私たちが、何を大切に生きるべきなのか、近藤さんとのインタビューの中に、そのヒントが詰まっていると思った。